

## 今週の為替相場見通し(2019年8月13日)

| 総括表      |      | 注 | 先週の値動き          |        | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|---|-----------------|--------|-----------------|
|          |      |   | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |   | 105.27 ~ 107.11 | 105.64 | 103.00 ~ 106.00 |
| ユーロ      | (ドル) |   | 1.1103 ~ 1.1249 | 1.1202 | 1.1100 ~ 1.1300 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |   | 117.68 ~ 119.88 | 118.37 | 117.00 ~ 119.00 |
| 英ポンド     | (ドル) |   | 1.2024 ~ 1.2209 | 1.2027 | 1.2000 ~ 1.2150 |
| (1英ポンド=) | (円)  | * | 126.97 ~ 130.07 | 127.22 | 126.50 ~ 128.70 |
| 豪ドル      | (ドル) |   | 0.6678 ~ 0.6822 | 0.6783 | 0.6720 ~ 0.6870 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | * | 70.75 ~ 72.72   | 71.72  | 70.50 ~ 72.80   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

### 1. 米ドル

為替営業第二チーム 網島 正侑記

(1) 今週の予想レンジ: 103.00 ~ 106.00 円

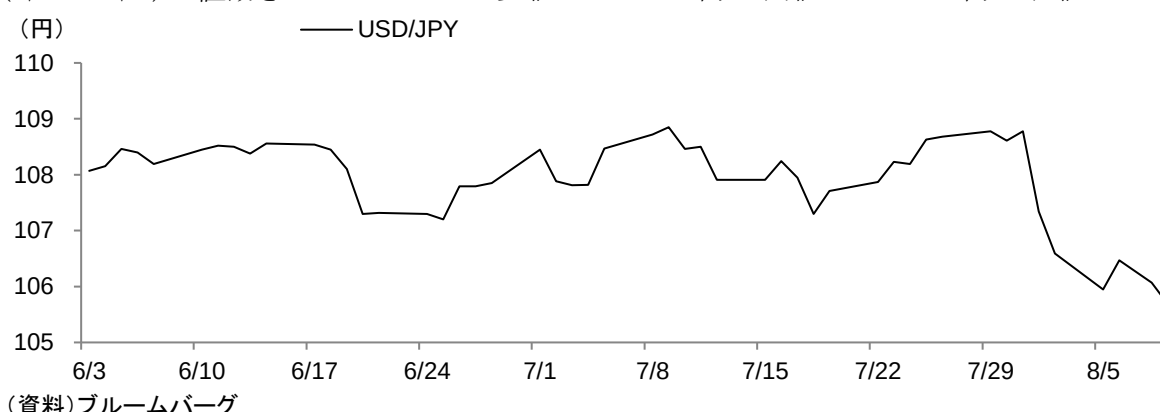
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は106.00円を中心に上下に振られる展開。週初106円台半ばで取引を開始したドル円は、オフショア人民元が節目となる1ドル=7元のレベルを上抜けたことをきっかけに一時105.79円まで下落。その後一時106円台まで上昇する場面もあったが、米株下落等も重しとなり上昇幅は限定的となり106.00円近辺でもみ合い。6日、東京時間早朝に「米財務省が中国を為替操作国に認定」との報道を受け一時105.52円まで下落となったが、下値を追う展開とはならずストップを巻き込みながら一時107.11円まで上昇。しかし、107円台での滞空時間は短く、106円台半ばまで反落。7日、ニュージーランド、タイ、インドの中央銀行が利下げを発表。ドル/円は105.94円まで下落となったが、欧州時間入り後は買い戻しが入り、106.20円近辺でもみ合い。北米時間入り後は米金利低下、株下落の流れを受け上値重く推移し、トランプ米大統領の「FRBは無能、速やかに大幅な利下げを行うべきだ」、エバンス・シカゴ連銀総裁の「リスクが増大しており、追加緩和が必要かもしれない」との発言も追い風となり一時105.50円まで下落。しかし、この水準では買い戻しの意欲が見られたほか、米10年債入札結果が予想以上に不調だったことを受け106円台前半まで反発。8日、アジア株が上昇する中、一時106.32円まで上昇するも北米時間入り後、トランプ大統領の「ドル高について嬉しく思っていない」との発言にドル売りで反応し反落。9日105円台後半を中心にもみ合い推移となるものの、積極的に下値を追う展開とはならず105.64円で越週。

今週のドル/円は上値重い展開を予想。出口の見えない米中貿易懸念が引き続き燃る他、世界的に利下げへ向けた気運が高まっており、リスク回避的な値動きは継続しよう。また、ドル/円の下落スピードも速い中で売り遅れている参加者も少なくないものと推測され、今週はお盆週ではあるが円安が進行する場面ではリープオーダー等を活用した実需による売りも想定されるため積極的に上値を追う展開とはなりにくい。また、重要な経済指標の発表も少ない中センチメントを改善させる手がかりも得にくく、基本的にはリスク回避的な動きが継続するものと予想。節目となる105.00円近辺では押し目買いによるサポートも期待されるが、一方で通貨オプション市場では引き続き円高方向を警戒する動きも見られる等、市場では引き続き円高方向を警戒する動きが活発であり、下抜けた場合には大きな値幅を伴って下落する可能性には警戒しておきたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/29~8/2)の値動き: 安値 105.27 円 高値 107.11 円 終値 105.64 円



## 2. ユーロ

為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1) 今週の予想レンジ: 1.1100 ~ 1.1300 117.00 ~ 119.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上昇する展開。週初5日に1.11 台前半でオープンしたユーロ/ドルは、一時週安値となる1.1103をつけるも、米金利低下を受けたユーロの買い戻しやユーロ/ボンドの買いに1.11 台後半まで上昇。対円でもドル/人民元が7.0を超える人民元安となったことを受けて週安値となる117.68円まで下落したのち、118円台後半まで上昇する展開。6日にかけてもユーロ買い優勢地合いが継続する中、ユーロ/ドルは一時週高値となる1.1249まで値を上げたが、その後は新規材料難な中、1.12 台近辺で方向感に乏しい推移となった。対円ではドル/人民元の基準値が予想対比元高に設定されたことによるドル/円の上昇に連れて一時週高値となる119.88円まで上昇したが、買いは続かず119円台前半を中心に方向感に乏しい推移となった。7日は欧州金利の低下を背景に、ユーロ/ドルは1.11 台後半まで下落したが、その後は米金利低下を受けたドル売りに1.12 台近辺まで強含んだ。翌8日は「ドイツ政府が均衡予算を断念し、新たに政府債発行を検討」との報道(当局が後に否定)やトランプ米大統領のドル高牽制発言を受けたドル売りにユーロ/ドルは1.12 台前半まで上昇する場面が見られたが、サルビーニ伊副首相が「総選挙が必要になる」と発言したことからイタリア政局不安が強まり、ユーロ/ドルは1.11 台後半まで売られた。9日は英4~6月期GDPが6年半ぶりのマイナス成長となったことでユーロボンドが上昇する動きにユーロドルも連れ高の展開。さらにトランプ大統領が米中貿易協議について交渉を継続しているが当面の合意はないと述べたことでドル売りとなり1.12代前半まで上昇したが、イタリア政治不安等を背景に買いは続かず1.120台で越週した。

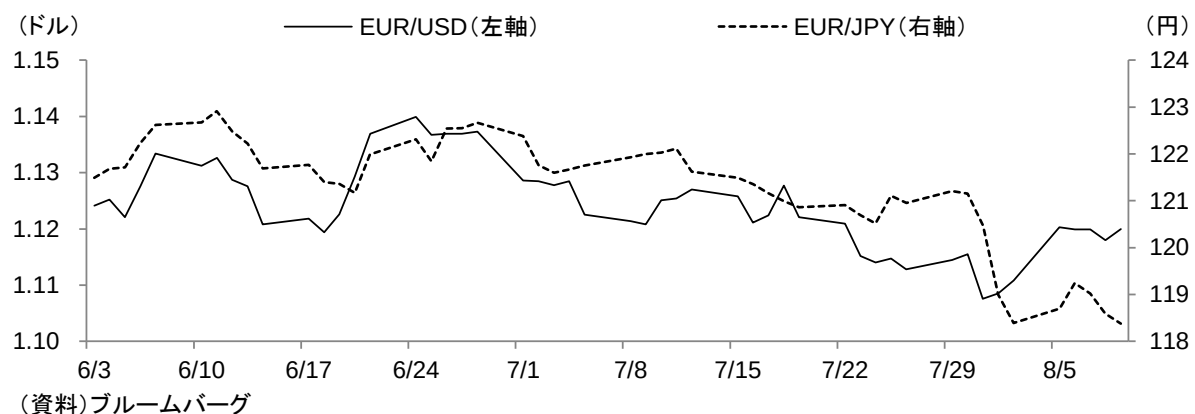
今週のユーロ相場は上値重い展開を予想する。米中貿易戦争の激化・長期化が懸念される中、ニュージーランド・タイ・インド等各国中銀が利下げに踏み切っており、世界的な景気減速懸念が広がっている。ECBについても9月の利下げが見込まれ、上値の重い展開が継続するであろう。またサルビーニ伊副首相がイタリア連立政権は対立が深まり崩壊しているとした上で、総選挙を要求。さらに、不信任案の議会審議が先送りなら閣僚を引き揚げを検討との報道も出ており、イタリア政治に対する不安が広がっており、ユーロの重しとなりそう。今週は14日(水)に独・仏・ユーロ圏の4~6月期GDP速報値が発表となる。ドイツはマイナス成長が予想される等、1~3月期からの成長減速が懸念されている。ユーロ圏の景気減速が意識される展開となるとユーロの下落リスクが高まりそう。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(7/29~8/2)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1103 高値 1.1249 終値 1.1202

(対円) 安値 117.68 高値 119.88 終値 118.37



## 3. 英ポンド

欧州資金部 川田 夏生

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2150 126.50 ~ 128.70 円

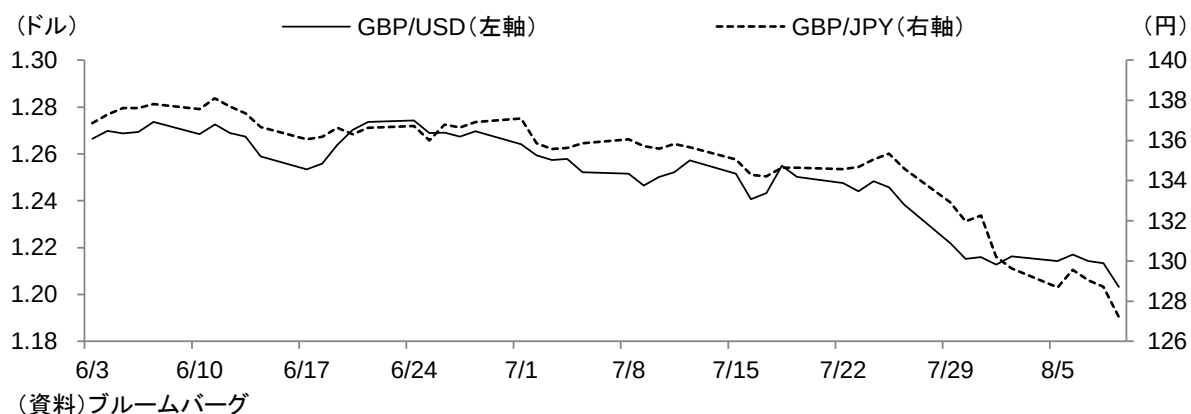
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、週初から週後半にかけて小幅なレンジで推移した後、週末に公表された英経済指標結果が弱かったことから英経済先行きへの警戒感が強まったことで下落した。前週にジョンソン英首相より10月31日のEU離脱の実現を改めて表明されたことに加えて、同首相が就任間もなく国内政策を矢継ぎ早に発表したことが解散総選挙を考慮したものであるとの見方が出てきており、上記動向に注目が集まっていた。週明け1.21台前半でオープンした英ポンドは、5日に公表された英7月サービス部門購買担当者景気指数が市場予想を上回り9か月ぶりの高水準となったことから1.21台後半まで上昇した。6日には、中国人民銀行が人民元下落を容認しない姿勢との報道が伝わると米中間の緊張緩和への期待からユーロなどがドル買いとなる中、ポンドはユーロポンドのポジション調整に押されてむしろ対ドルで上昇、一時1.22台をつけた。その後、野党労働党コービン党首から、合意なき離脱を回避するために9月にも内閣不信任案を提出するとの考えが示され、また8日には、議会が内閣不信任案を可決した場合にはEU離脱後に解散総選挙が実施されると報じられるなど、Brexit関連のヘッドラインに英ポンドは上値を抑えられ1.21台に値を戻す展開となった。週後半にかけては、目新しい材料に乏しく、米中貿易問題の緊張が高まる中で英ポンドは上値重く、小幅なレンジ内で米中に関するヘッドラインに振られる展開となった。週末には、9日に公表された英4～6月期GDP速報値が市場予想を下回る結果となり6年半ぶりのマイナス成長となったことから、英ポンドは前日までのレンジを抜け1.20台半ばまで下落した。その後、英ポンドの上値は重いまま1.20台後半で週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、ヘッドラインに振られながらも狭いレンジでの推移を予想。ジョンソン英首相は強硬姿勢を崩しておらず、野党労働党は内閣不信任案提出の考えを示し、総選挙の可能性もある中、議会休会明けとなる9月にも議会での対立となる可能性が出てきており、合意なき離脱への警戒感は引き続き根強い。英議会の休会明けまで上記が進展する可能性は低いとみられ、また、先週末に公表された英GDP速報値がマイナス成長となったことから英経済の先行きが懸念されており、英ポンド相場は引き続き上値の重い展開となると考える。一方、米中貿易問題の動向は英ポンド相場にも影響を及ぼしており、中国人民銀行の人民元基準値設定のスタンスやトランプ米大統領発言に注目が集まる。先週末には、トランプ大統領が米中は貿易交渉を継続しているものの当面の合意はないとの考えを示したと報じられており、先週から引き続き同問題によって相場が変動する可能性は高いと考えられる。今週のイベントについては目立ったものは少なく、主な欧州経済指標では14日(水)の英7月CPIが予定されている。また、英ポンドが米中貿易問題関連のヘッドラインに振られていることから、13日(火)の米7月CPIや14日(水)の中国7月小売統計及び中国7月鉱工業生産、中国7月固定資産投資そして15日(木)の米7月小売統計についても注目する必要があると考える。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(7/29～8/2)の値動き: (対ドル) 安値 1.2024 高値 1.2209 終値 1.2027  
(対円) 安値 126.97 高値 130.07 終値 127.22



## 4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 原田 直彦

(1) 今週の予想レンジ: 0.6720 ~ 0.6870 70.50 ~ 72.80 円

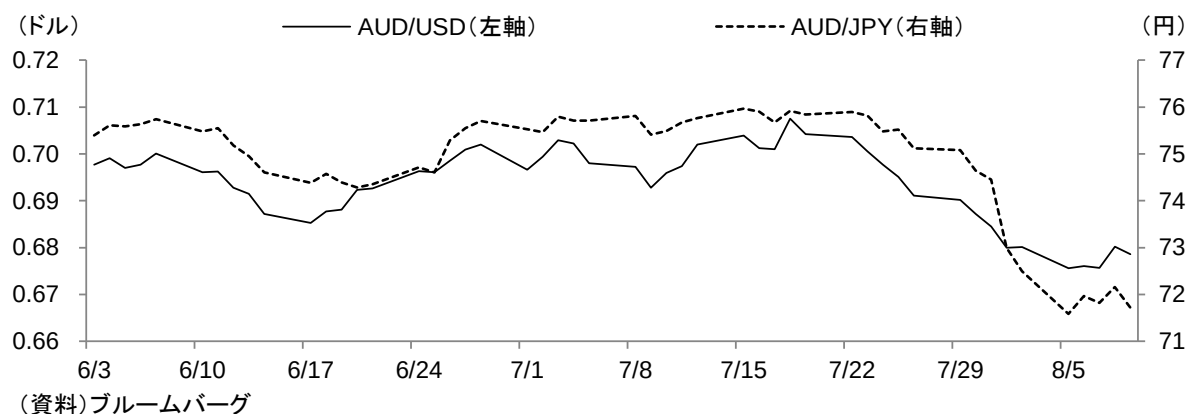
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.66台まで下落後、0.68台を回復するボラタイルな値動きとなった。週初5日、0.68ちょうど近辺で推移していた豪ドルは、米中貿易摩擦の激化懸念から株式市場がアジア、欧米時間ともに大きく下落する中で、0.67台半ばまで下落した。6日、豪6月貿易収支は予想対比強めの内容。迎えた8月オーストラリア準備銀行(RBA)理事会では、キャッシュレートを1.0%に据置きと予想通りの結果で、声明文の内容についても「労働市場の動向を引き続き注視し、必要なら金融政策を緩和する」など、これまでに示された認識から大きな変化は無かったことから、市場への影響は限定的だった。7日、朝方は0.6760近辺で推移していた豪ドルは、午前中は株式市場の堅調推移もあり小幅上昇していたが、ニュージーランド準備銀行がキャッシュレートを1.5%から1.0%へ予想外に50bpの利下げを実施したことにより、ニュージーランドドルが急落。連れて豪ドルも大きく下落し、一時週安値となる0.6678レベルまで下落した。しかし海外時間に入り、株式市場、金利ともに徐々に上昇に転じると、豪ドルにも買戻しが入り0.67台半ばまで上昇した。8日は、強めの中国貿易指標、人民元が予想よりも元高水準でフィクシングしたことなどを受け、米中貿易摩擦に関わる懸念が若干緩和し、各国株式市場が概ね上昇となる中で豪ドルも上昇し0.68台を回復した。9日、ロウRBA総裁の議会証言、RBA四半期金融政策報告は、「低金利の長期化を予想するのが合理的」、「必要があれば一段の金融緩和の用意がある」などこれまでと同様の内容で市場への影響は限定的で、0.68台前半での推移。引けにかけて米中貿易問題への懸念から下落し0.6780レベルで週の取引を終えている。

今週の豪ドル相場は0.68を中心としたもみ合いを予想する。これまで6月、7月と連続して利下げを実施したRBAは8月は据置きと一旦様子見姿勢となった。豪州の利下げ観測については先行き一年間で更に50bp以上の利下げが織り込まれている状況であり、引き続き利下げの適切なタイミング、ペースを探る展開となろう。CPI等一部指標については改善傾向が見られるものの、利下げの景気へのポジティブ効果が出てくるには時間がかかる恐れ、今後の経済指標には注目が集まる。今週は、15日(木)に、RBAが今後の金融政策を占ううえで重要としている豪7月失業率の発表が予定されており、雇用の動向には注目したい。一方で、8月に入って以降、マーケットのテーマが米中貿易摩擦の行方に移っており、中国の景気鈍化懸念が豪州経済の重しになるとの見方から、豪ドルの下押し圧力となっている。豪州対比、米国の利下げ余地は大きく、中期的には豪ドルの上昇を見込むものの、貿易問題が熾り続ける限りは、経済指標が改善した場合においても、豪ドルの大きな上昇は見込みづらい。今週も米中貿易摩擦問題の進展が相場の鍵となろう。また8月以降更に高まった米国の利下げ観測についても、頻繁にトランプ大統領からFRBのスタンスへの批判コメントが出ている状況であり、豪ドルの行方を占ううえでの米国の金融政策動向についても注意を払いたい。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(7/29~8/2)の値動き: (対ドル) 安値 0.6678 高値 0.6822 終値 0.6783  
(対円) 安値 70.75 高値 72.72 終値 71.72



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。